

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

高 誠晩

【所属】(助成決定時)

立命館大学衣笠総合研究機構

【研究題目】

紛争後社会におけるディアスポリックな吊いの実践

【研究の目的】(400字程度)

本研究の主な目的は、従来の移行期正義論における「断絶」論的欠陥を乗り越えるとともに、紛争後社会を生き抜く人びと(サバイバー)を単なる微力な存在としてではなく、政治的・社会的な認識の変化に敏感に対応しつつ工夫を凝らす主体的存在として捉えたうえで、彼/彼女たちのリアリティを解明することにある。こうした目的を達成するために、本研究では、20世紀後半の東アジアの紛争後社会における「負の過去」の克服と清算をめぐるダイナミズムを解き明かすことを試みた。そのため、20世紀中葉における東アジアの島嶼地域に生じた紛争の事例として、大韓民国成立期における「済州島4・3事件」と植民地支配解放後の台湾で起こった「台湾2・28事件」に焦点を当てた。具体的には、済州島4・3事件から逃れて日本に密航し定着した済州島出身者による近親の死者への吊いと、台湾2・28事件に巻き込まれ行方不明になった南西諸島出身者の遺族による吊いなど、現代東アジアの国際秩序や国民国家フレームには収まりきらない人びとの具体的で微細な実践を明らかにすることを目的とした。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、国民国家を単位とする移行期正義論の範疇に収まらないディアスポリックな吊いの実践を注目した。これらの事例研究をふまえて、最終的には、国家からの理不尽な暴力に対する民衆の生活知の潜在的可能性を展望した。

研究方法としては、主に、史資料研究とインタビュー調査、参与観察を通じて得た情報を有意義な資料として活用するためにデータ化し、理論研究を通じて得た論理と結合させることによって、最終的な研究成果を導き出すことをめざした。その中でもとくに、参与観察は、国民国家の枠組みの中で執り行われている公的な慰霊・顕彰への調査とともに、体験者グループによって創案・運用され、今日まで継承されている国境をまたぐ吊いの諸実践を対象とする。また、それらが国家主導の慰霊・顕彰と葛藤・折衷・融合する様相も射程に入れる。

各国・各地域において繰り広げられる移行期正義の法・政策には「犠牲」と「非犠牲(望ましくない死)」を分ける線引きが存在するが、本研究の主な対象は、そのような境界線上に立つケースに焦点を当てた。予備調査の段階で15名程度のインフォーマントを把握したが、例えば、1)大韓民国政府の正統性について異議を申し立て、済州島4・3事件から逃れて日本に密航し定着した済州島出身者の遺族や、2)台湾2・28事件に巻き込まれ国民党軍によって虐殺された南西諸島出身者の遺族など、20世紀東アジアの冷戦体制や国民国家フレームと深くかかわっている移行期正義の法・政策には収まりきらない人びとの具体的で微細な経験に絞って調査を実施した。

すでに予備調査の段階で数名のインタビュー可能なインフォーマントと資料提供者の協力を得られたが、本調査実施に先立ち、調査対象者とのさらなる信頼関係を築くことに努めた。

【結論・考察】（４００字程度）

日本帝国崩壊後の人の移動と紛争により、（国家暴力による）近親の死者を弔う行為もディアスポリックになってきた。本研究では、従来の移行期正義論が設定した国民国家といった枠組みに回収できない、国境をまたぐ弔いの実践をめぐる歴史的・社会的状況を、動学的・包括的に把握することを試みた。従来の研究では、こうした激動の歴史のなかで置きざりにされてきた人びとの存在が等閑視され、またしばしば移行期正義の法・制度が生じさせる「不可避な被差別マイノリティ」として位置づけられてきた。しかし、本研究では、彼／彼女たちを単にマイノリティとして取り扱うことではなく、「記憶の交差点を歩く者たち」として、近親者の異常死にこだわりながら、積極的な生の戦略を駆使する存在として位置づける。彼／彼女たちの生活実践には、昨今の東アジアにおける「歴史認識問題」をめぐる葛藤・対立と、それを増幅させる国民国家とナショナリズムを再考する可能性が内包されていると考えるからである。本研究が解明すべき課題として、そこには東アジア社会の相互理解と相互連帯に貢献する潜在力を持っていると言えよう。